『曾我物語』の一万箱王兄弟

―幼年期の二人の描かれ方の諸本間の相違―

小井土　守敏

Ⅰ　はじめに

曾我兄弟の十八年間の苦節の末に達成された「敵討ち」を題材とする『曾我物語』には、多数の異本が伝存しており(1)、それらの異本間の本文の差異、系統の相関などは、諸氏によって整理されている。

荒木良雄氏は、「曾我物語三遷の論」において、諸本の系統を、本文の表記形態の差異と、著作したと思われる人物に着目して整理し、以下のように述べておられる。

曾我物語は、先づ史実を中核に、その周辺にある伝承集成の形をとつたやゝ煩瑣な原形真名十巻本の成立を見、次にそれを少しく簡略しつゝ補定を加へた仮名交り十巻本が成り立ち、最後に、それに挿話の多くと後日譚とを追加した仮名本十二巻本が出来上つてそれが一般に流布したのだと考へられ、真名本は箱根山僧、大山寺本の属する仮名十巻本は叡山僧、流布十二巻仮名本は浄土宗僧が、それぞれの作者であつたらうと推定せられる。即ち曾我物語は、およそ三遷したと考へられるのである。

荒木氏は、このように・真名十巻本・仮名交じり略本・十巻仮名本・十二巻仮名本の四系統に諸本を分類整理された。この分類は、その後の研究において通説となっている。(2)

大石寺本を校訂された生田目経徳氏は、『標註異本曾我物語』の序文に、諸異本の関係について以下のように述べておられる。(3)

真字本は、将門記の如く、漢字のみにて書き、文章は、きはめて拙く、仏法の引証など、うるさきまで多し、併、流布本、異本等の原本とおぼゆ、ヲコト点をつけて、よませたるにテニヲハなどは頗正しきものなり。

流布本は、真字本を、仮名に訳したるものにて、読者を悦ばしめんために潤色を施し、附会の説を加へたること尠からず。

右の流布本とは、本稿で言う仮名本を指している。諸異本の関係についてのこの見解は、基本的には現在でも認められている。

また、村上学氏は、『曾我物語の基礎的研究』付篇第二章「真字本と仮名本のストーリー構造」において、兄弟の祖父伊藤祐親と母の人物造型と、兄弟が母のもとを去る場面を取り上げて真名本と仮名本とを比較し、その相違を以下のように述べておられる。

歴史的なリアリティ志向と周到な積み重ねをしたストーリーの展開により内面的および外的に必然性を以て人物像の変容を生じるといったダイナミックな物語構造の真字本と、単一固定的な性格を有する諸人物が対立しながらもそこには葛藤による変化などは生じない平面的な疑似劇的世界、いわば万華鏡ふうの世界構造を有する仮名本ということになるのである。(4)

これらの論は、本稿の出発点ともいえるものである。

『曾我物語』の諸異本間には、筋書きだけを追うならば大きな相違は見られない。しかし、語法、表現型、思想をはじめ、特に物語に登場する人物の性格の造型のされ方や物語の中で果たす役割に関しては、大きな相違が見られるのである。真名本から仮名本に至る間に、登場人物の造型に改変が行われた。それは、生田目氏の言われるとおり「読者を悦ばしめんため」の潤色であり、村上氏の言わ

れるようにもっと根本的な「ストーリー構造の相違」であるというわけである。

では、その改変とは、どのようなものであり、またどのような場面に生じているのであろうか。またそのように変化したのはどのような理由によるのであろうか。本稿は、この、稿者の極めて素朴な疑問から出発するものである。

本稿では、荒木氏による四系統の分類に従い、

真名十巻本　妙本寺本　略号【妙】
仮名交じり略本　大石寺本　【石】
十巻仮名本　大山寺本　【山】
十二巻仮名本　十行古活字本　【十】

の四本をテキストとして検討する。本稿では、以上の四本の間にどのような相違が現れているかを、特に、曾我十郎祐成（幼名一万）と五郎時致（幼名箱王）の幼年期に関する記事について、『曾我物語』のテーマともいえる「親の孝養に奉ず」という点を中心に考察する。

Ⅱ　兄弟の登場

『曾我物語』において、主人公である兄弟の作中人物としての登場は、

伊豆國住人伊藤次郎助親孫子、曾我十郎助成、同五郎時宗兄弟二人計、不憚將軍家陣内、討親敵、藝施當庭、名留後代、
（【妙】）

という、巻第一における『曾我物語』の概要を説明する部分を別として、【妙】【石】では巻第二、【山】【十】では巻第一の後半部と、比較的遅い。それは、『曾我物語』においては兄弟の登場に至るまでのその人物・利害関係の説明が必要とされるためである。

父河津祐通が他界した年には、兄一万は五才、弟箱王は三才であった。父の屍を前にした兄弟の描かれ方は、四本を通じてほぼ共通している。

三歳になる箱王は、是をも聞知らずして、たゞ手すさみして居たりける。五歳になる一萬は、父の死骸をつく〴〵と守り居て、兩眼に涙を浮め、いつかせめて十五歳になり、親の敵を狙うて見ん。
（【石】）

このように、一万は、父の死を認識できる子供として描かれている。【妙】には「何責成十五躯親敵助經見、」とあり、親の敵が祐経であることまで一万は知っているように描かれている。さらに【山】【十】においては、巻第八の富士野の巻狩で敵祐経を射殺す好機に、彼は、父が射られた場所と同じ行縢の引き合わせを狙うということから、父が射殺された様子までもこの時点で認識していたのではないかと推察できる描き方である。

しかし、一方の箱王は、「聞知る」ことのできない幼児として描かれる。この時点における箱王は、単に「てずさみしてあそぶ」子供であることが強調されているのである。

このように、四本を通じて、父祐通の死の段階では、五才の兄一万は父の死を認識できるのに対して、三才の弟箱王はまだそれを認識できない、という描き分けをされているのである。

Ⅲ　仇の認識

その後、兄弟は母の再婚に伴い、伊藤の地を離れ、曾我太郎祐信

の子供として曾我の里で少年期を過ごす。この間に、政権は平家から源氏に移り、平家方であった兄弟の祖父伊藤入道（祐親）は滅びる。兄弟は政権の敵方の末裔という境遇になってしまう。一方敵祐経は、伊藤入道と敵対して以来、早くより源氏方について、入道没後本来の伊藤荘に入り、頼朝の重臣として繁栄の途を辿っていく。

そうした中で、成長していく箱王が、以下のように描かれている。

イ　成七歳筥王、或晩傾乍戯母膝上、何母御前、父何御在、誠耶、人語、父御前成佛御在、其佛在何、行拜、（【妙】）

ロ　箱王重申、父御前實自狩庭返道被射宮藤一郎耶兄御前常語耶、（【妙】）

【石】における記述も、これとほぼ同様である。イの記述に見るように、七才の箱王は、いまだに「死」という概念すら持ち得ない子供とされている。また、ロの記述からは、箱王は、「父祐通を殺害した人物は工藤祐経である」という事実に確信を持てない幼さであることが伺える。この記述に続けて、さらに、箱王は、逆に祐経が自分達兄弟のことを害そうとしているのではないか（【妙】【石】）と危惧している、と記されている。

このように、【妙】【石】において、箱王は「子供らしさ」を残しているという描き方をされているのに対して、【山】【十】では、以下のように描かれている。

やう〳〵成人するに從ひて、父が事を片時も忘れずして、折りに隨ひ事に觸れて歎きけるこそ無慙なれ。（【山】。【十】もほぼ同）

兄弟の別が明記されていないのは、一万・箱王ともに、父の死を認識していると造型されていると考えて支障はない。さらにこの記述に続けて、

いつかわれ等二十になり、父を討ちし左衛門を討取りて、母の御心をも慰め、父の孝養にも奉ぜんと、忙しきは年月なり。（【山】。【十】もほぼ同）

とある。これも兄弟のどちらかの心情かは問題とされていない。既に、兄弟ともに父の敵が祐経であることをはっきりと認識し、「親の孝養に奉ぜん」という目標を抱いているわけである。

『曾我物語』の主題としての敵討ちを裏付け、正当化するものが、この「子は親の孝養をするもの」である。【妙】【石】に対して【山】【十】は、巻第三の、一万九才、箱王七才の段階で、既に物語のテーマを担う造型をされているのである。

この描かれ方の【妙】【石】と【山】【十】との間の差異は、物語においてこれ以降の記述にも影響を及ぼすことになる。

弟筥王打低樋領状、（【妙】。【石】もほぼ同）

筥王聞きて「さる事にては候へども、大事の敵を弓にては遠くおぼえ候。斯様に首斬らん」とて、障子の紙を引裂きて、高々と差上げ、持ちたる竹の弓にて、二三に打切りつゝ、勢あまりて立ちたりける。（【山】。【十】もほぼ同）

九月十三夜に、兄弟が月をながめながら父を思い、嘆く場面である。一万が親の敵祐経を射殺すためにも弓を習うよう箱王に勧めると、【妙】【石】では、箱王はただ兄の言葉にうなずき、同意するだけであるのに対して、【山】【十】では、箱王は射殺すよりも首を斬ろうとを主張し、障子紙を破るという行動を起こすのである。

また、【十】には次のような兄弟の問答が載る。

「親の敵とやらんが首の骨は、石よりかたきものかや」ととへ

ば、兄がききて、袖にて弟が口をおさへ、「かしかまし、人やきくらん、聲たかし、かくす事ぞ」といへば、箱王きゝて、

「いころすとも、首をきるとも、かくしてかなふべきか」「さはなきぞとよ。それまでもしのぶならひ、心にのみ思ひて、上は物をならへとよ。・・・」　（【十】）

箱王の無邪気とも言える暴言を一万が制している点が特に注目される。この辺りから、【十】では、大胆な弟に対する冷静な兄として造型され始めているといえるからである。

同じく【十】においては、箱王が障子紙を破る様子を、語り手は、「人にかはりて」（【十】）勇猛に、また恐ろしいと語るのである。

兄弟の密談が母に洩れ、母に制される場面では、箱王の描かれ方に【妙】【石】と【山】【十】の間で大きな差異がある。

箱王、いなをらざるに、障子のやぶれたるをしかりたまふべきかと心へて、「障子をば損じ候はず。よその童がやぶりて候を乳母がこと〳〵しく申して」　（【十】。【山】もほぼ同）

【妙】【石】には箱王が障子を破るという記事が見られないため、これに対応する記事が見られない。【山】【十】では、この記事で前条の箱王と、造型が呼応しているのである。

二人少者共閑心、目與目見合、顔打赤面立、　（【妙】。【石】もほぼ同）

一萬顔うち赤め打傾き、御返事にも及ばず。筥王は打笑ひ「乳母の申様にてぞ候らん。更に我等は跡も形も知らぬ事にて候」と申しければ、　（【山】。【十】もほぼ同）

母に制された後の兄弟の態度である。一万は四本を通じてほぼ同じ描かれ方であるが、箱王は、【山】【十】では、あくまでも知らぬふりをする。これに関して、荒木良雄氏は『大山寺本曾我物語』の頭注に、以下のように述べておられる。

真名本には「泣々話立被誠、二人少者共閑心、目與目見合、顔打赤面立」とある。仮名本は、之を発展させて箱王の性格を鮮やかにしている。(3)

弟箱王は、大胆かつ強気な人物として描かれ、兄とは異なる個性の持ち主として描かれていくのである。

Ⅳ　兄弟の鎌倉召喚

【山】【十】では、兄弟が頼朝の召喚によって鎌倉へ召し出され、由比の浜で斬罪に処せられそうになる場面が設けられている。それに対して、【妙】【石】では、密談する兄弟を制する母の言葉の中に、

其上汝等被召鎌倉時曾我殿歎申留、　（【妙】）

とあるのみで、【山】【十】の記事に対応する場面は設けられていない。そして、兄弟が鎌倉へ召された時、養父曾我太郎祐信が合戦での恩賞を返上して兄弟の助命を嘆願したとある。【山】【十】では、この場面を増幅させ、【十】に関しては、「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」「母なげきし事」「祐信、兄弟つれて、鎌倉へゆきし事」「人々、君へまいりて、こひ申さるゝ事」「由比のみぎはへひきいだされし事」「畠山重忠こひゆるさるゝ事」「臣下ちやうしが事」「曾我へつれてかへり、よろこびし事」と、章段を重ね、兄弟助命のために畠山重忠が尽力したことを描いている。

【山】【十】では、兄弟が由比の浜で今にも斬られるという場面で、

（箱王は）涙に咽び打伏しぬ。一萬これを見て、弟を諫めて云ひけるは「如何にや筥王、振舞見苦し。われ等曾我を出でし時、母の訓へ給ひし事忘れ給ふや。人もこそ見れ」と荒らかに申し諫めければ、筥王この詞にや恥ぢたりけん。その後は歎く氣色も見えず、打笑ひ〳〵しける　（【山】。【十】もほぼ同）

と、自分たちが立たされている状況を理解した上で覚悟を決め、さらに世間体にも気を配ることができるような、常に冷静で大人びた一万として描いている。箱王を一万が制するという描かれ方で統一されているのである。

V　一万元服、箱王箱根へ登る

一万は、十三才にして元服し、曾我十郎祐成と名乗る。一方、箱王は、母の勧めにより、法師になるべく、箱根へ登る。母の説得に対して、箱王は、

箱王泣々畏り入り候。父の此世に御座さぬと承りしより以來は、先の世にいかなる罪を作りてか、父といふ事知らざるらんと、人知れぬ涙のみ露けく候ひしに、斯様の御諚を承る、兎も角も仰に隨ひ候べしとて立ちにけり。（【石】。【妙】もほぼ同）

筥王は思ふ事あるものをと思ひながら、未だ幼き者なれば「さ承りぬ」と申せば、　（【山】。【十】もほぼ同）

と応対する。【妙】【石】に描かれる箱王は、父親を知らぬわが身を嘆き、とにかく母の言葉に従おうとする。この記事に続いて、学問に励む箱王が、師の箱根の別当にかわいがられている、という記事がある。これに対して、【山】【十】では、「思ふことある」箱王として描かれる。巻第三から「親の孝養に奉ぜん」と決意した箱王は、ここでも敵討ちという宿願を抱いていることをうかがわせる描き方である。

箱根に登った箱王には、一つの悩みがあった。それは同宿の弟子達には届く父からの便りが、自分だけには無かったことである。

此三年箇間在此御山、常見母御文許、父御文未見其手跡口惜、付之敵恨助經、　（【妙】。【石】もほぼ同）

【妙】【石】では、ここで初めて箱王の口から、父の敵として祐経を意識し、恨めしいという表現が見られるのである。そして、

南無歸命頂禮箱根三所権現、藤原の箱王丸、志を寶前に運んで、怨敵降伏の願望を遂げしめ給へ。　（【石】）

是程宿願何可无御納受、若不令見敵助經躰、只今於御寶前忽召命祈念、竟夜悵焦哀、　（【妙】。【石】もほぼ同）

と祈願するのである。

一方、父の敵をすでに認識し、敵討ちの宿願を抱く【山】【十】の箱王は、父からの便りの無いことを嘆き、

箱王は、あらたま年の祝言をもわすれ、あたらしき春の朝拜をも、ものならずおもひこがれて、晝夜は、権現にまいり、「南無歸命頂禮、ねがはくは、父の敵をうたしたまへ」と、あゆみをはこびける。　（【十】。【山】もほぼ同）

という描き方がされている。

文治三年、頼朝の箱根参詣に伴い、箱王は、祐経に出会う機会を得る。【妙】【石】ではこのことを知って箱王は、「隨喜の涙」を流したとし、【山】【十】では「その日をまちし心のうちたゞ千年をおくるばかり」の心境であるとする。

箱王は、祐経を見知り、「一刀刺して如何にもならん」と、彼の

傍らにまで行くが、祐経に見破られて、本意を遂げることはできない。その夜、宿でも祐経を狙うが機を得られず、堂が島へ発ってゆく頼朝の一行を見送る。この件が次のように語られている。

箱王力に及ばず、敵の後姿を見送りて、甲斐なき涙をぞ流しける。・・・縦ひ今度こそ空しく止みぬとも、助經を、終には必ず我手に懸けさせ給へと、権現若し叶ふまじくば、身を忽ち蹴殺し給へとぞ祈念しける。（【石】。【妙】もほぼ同）

筥王は船着きまで紛れ出でゝ、敵の後を見送りて、・・・目をも散らさず、左衛門尉が船の中を見送りて、泣くより外の事ぞなき。（【山】。【十】もほぼ同）

一字も忘れじと思ひし經文を打捨てゝ、晝夜に権現に參り、「今度こそ空しく候とも、遂にはわが手に懸けさせ給へ」と祈り申すぞ哀れなる。（【山】。【十】もほぼ同）

【妙】【石】には、箱王が船着き場まで追いかけた記述や、祐経の船の中まで見ていた記述はない。【山】【十】に描かれた箱王の、執心の深さがうかがえる。【十】には、さらに、この記事に続けて、刀工の子が父の敵である楚の王を討つために、自らの首をかきおとし、首だけとなって王に近づき本意を遂げたという、執念の恐ろしさを物語る説話である「眉間尺が事」の章段を挙げ、それになぞらえて、箱王の悔しさと執心の深さを表している。

Ⅵ　箱王、寺を出る

母の意向に従って、法師になるために箱根に登った箱王は、十七才となり、九月上旬に髪を下ろすことになる。その前夜、箱王は人目を避けて寺を出て、兄十郎のもとへ下る。

頼朝の箱根参詣の際、祐経を見知り、機を得られないまま執心の深まった箱王は、兄十郎に自分の進退を問う場面である。

筥王以袖押顔、泣々申、既明日必可成法師承、何様奉申合、爲計左右語下候、十郎聞之、我承一定、打上奉見御有様思、中々世不被當目思、不思立只獨泣居處、喜御合袖泣、（【妙】。【石】もほぼ同）

【妙】【石】の箱王は、敵討ちという宿願を抱いたまま出家するという矛盾に悩み、兄に相談するために下山する。箱王を出迎えた祐成は、弟の出家という成行きに、ただ悲嘆に暮れる。つまり、この夜の箱王の行動がなかったならば、祐成は、ただ泣き暮らし、敵討ちも遂げられなかったであろう、というように描かれているのである。ところが、【山】では、祐成は、

「如何にしてましますぞや。明日は一定出家の由聞きつる間、急ぎ上りて見奉らんと思ひつれども、定めて目も當てられじと思ひて泣きゐつるぞ」と宣ひければ、（【山】）

と、泣いていたと語られているが、当日の早朝に箱根に登る意志があったことを語っている。【十】の祐成は、

「いかにしてましますぞや。明日は、一定出家のよし、きゝつる間、のぼりて見たてまつらんと存ずる所に、くだり給ふうれしさよ」といひければ、（【十】）

と、涙さえ流していない。以下、弟と冷静に問答する兄として描かれている。また、箱王は悩みのすえ下山したと描く【妙】【石】に対して、【山】【十】の箱王は、

のび〳〵の御心なるべしとおもひつるに、すこしもたがはず。かやうの事、きは〳〵と、かねてより御さだめ候へかし。すで

にあけなば、事さだまるべし。うちのびて、道ゆくべきにあらず。よくぞまいり候ける。御左右をまちまいらせなば、むなしく髪をそられなん。（【十】。【山】もほぼ同）

と、怒りの色さえうかがえる描かれ方がされている。「きわ〳〵と、かねてより御さだめ候へかし。」に見られるように、連絡をよこさない祐成になかばしびれを切らし、自分がこのまま法師となってもよいのかと、脅迫しに下山したかのようである。箱王の言葉の中には他にも、

はや〳〵是非の御返事をうけ給はりきるべし。身の浮沈、今に候なり。（【十】。【山】もほぼ同）

と、兄の決断を焦り気味に待つ様子がみられる。箱王にも元服をしてもらいたいという、祐成の本心が分かった後にも、

さほどおぼしめしさだむること、などや、かねてよりうけたまはり候はぬや。それがし、まかりくだり候はずは、御左右あるまじきにや。（【十】。【山】もほぼ同）

とたたみかけるような言葉になっている。つまり、巻第三から「父の孝養に奉ぜん」と決意していた箱王の下山は、【山】【十】では、ゆったり構えている兄を叱責するためのものであったのである。また、【妙】【石】における事の次第を悲嘆しながら傍観する祐成に対して、【山】【十】では、祐成は箱王が下山してくることを予期していたかのように冷静な態度であるように描かれている。後に再び考察を試みるが、【妙】【石】において「聲を合せて泣きにけり」と語られていた弱い兄弟は、【山】【十】に至って、大胆な弟と冷静な兄、つまり強い兄弟へと変えられているのである。

Ⅶ 兄弟の幼年期の描かれ方の相違

四本を通じて、兄弟の幼い時期において、父祐通の死に際して、兄は敵を認識し、弟は父の死さえ認識できずにいた。対照的な描かれ方であると言ってよい。

そこを始点とし、【妙】【石】における弟箱王は、巻第四に見られるように、箱根において、父がいないことを実感し、兄弟から父を奪った敵祐経を恨む。実際に祐経を見知り、殺害しようと試みる。将来仏門に入るべきわが身にある敵討ちの欲求に悩み、兄に相談するために下山する。このように、弟箱王は、自らの苦い体験から「敵討ち」への執念を確固としたものにしてゆく。また、語り手は、箱王が、親の敵を認識し、執心が深まってゆく過程を、順を追って語っていると見ることができる。

それに比べると、【山】【十】における箱王は、自らの体験からではなく、兄の語る言葉によって、早くも七才にして自らの親の敵を十分に認識し、「敵討ち」に、深い執念を燃やしている。【妙】【石】に比較して、【山】【十】では、兄弟が、早い段階から「敵討ち」によって「父への孝養」を成そうとしていたという、『曾我物語』のテーマに関わる造形がなされていることになるのである。

また、兄一万は、四本を通じて常に分別のある大人びた人物として描かれているが、【妙】【石】に比較すると、【山】【十】に描かれた兄は、さらに大人びており、騒がず静かに「親の孝養にも奉ぜん」がために、冷静な人物として描かれている。兄がより冷静に描かれる分だけ、【山】【十】において箱王は、強気で大胆な人物として描かれることになるといえる。

このように四本それぞれに登場する兄弟の造型が変化した理由に

関して、福田晃氏は次のように述べておられる。

さて、仮名本曾我物語が生成されるなかで、語られる曾我物語が存して、主に鼓を打つ女盲に管理されていたことは、はやくに指摘されている。たとえば、室町中期頃の成立と推される『七十一番職人歌合』の二十五番には、「琵琶法師」の対に「女盲」があげられており、その絵には、

宇多天皇に十一代の後胤。いとうがちやくしにかはづの三郎とて

と、鼓を打ちながら曾我物語の一節らしきものを語っている姿が紹介されている。勿論、この語りの詞章は、現存曾我物語のテキストにそのままは見えないが、当代の女盲、瞽女の代表的な語り物として、曾我兄弟の物語があったことを示していると言える。・・・また、応永末年の作と推される謡曲「望月」には、安田庄司の妻と子の花若をして、敵の望月秋長を討たせるために、安田の妻が盲御前に扮して、

こゝに河津の三郎が子に。一万箱王とて。兄弟の人ありけるが。五つや三つの頃かとよ。父を従弟に討たせつゝ。既に年ふり日を重ね。七つ五つになりしかば。……

と、曾我兄弟の物語を語る場面が用意されている。そして、この詞章も、現存のテキストには見えぬことが注目されているが、あえてシテの小沢刑部の口を通して、「今頃此宿にはやり候ふものは盲御前にて候ふ。・・・盲の振舞にて座敷へ御出で候へ」と誘われるままに、ツレの安田の妻が、それを受けて「一万箱王が親の敵を打つたる処」と語る趣向は、曾我物語を語る当代の盲御前の流行に従ったものと言える。しかも、これらの「曾我語り」は、いずれも鼓を伴奏とするがゆえに、曲舞に通じて謡い物的要素が強かったと推されている。(6)

福田氏は、この論文の中で、他にも多様な語りの形態が存在していたことを指摘し、「曾我語り」が真名本成立の一つの原動力となったと述べておられる。つまり、仮名本系『曾我物語』が享受された頃には、人々は「曾我語り」等によって、『曾我物語』とは、曾我兄弟の敵討ちの物語であるということをある程度承知していたであろうと推測できる。

であるから、物語の享受者の興味は、真名本系に見られるような、兄弟がどのような段階を踏んで「敵討ち」への執念を深めていったかではなく、曾我兄弟がいかなる苦難の末に敵討ちを遂げたのかということに絞られていくのである。そしてその苦難が大きければ大きいほど、それを克服していく兄弟への賞賛は高まっていくのである。仮名本系に至って曾我兄弟は、「敵討ち」を遂げるために読者の前に登場するのであり、はじめから兄弟は、いかなる苦難も克服していく揺るぐことのない「敵討ち」への執念に貫かれていなければならない。そのために、曾我兄弟は物語の早い段階から「強い兄弟」として造型されるのである。真名本系【妙】【石】と仮名本系【山】【十】との間に行われた改変は、曾我兄弟に対する享受者の要求と捉え方の差異によるものであると言えよう。

［注］

（1）『曾我物語』諸本は、以下の文献により引用する。

妙本寺本　（貴重古典籍叢刊妙本寺本曾我物語）

大石寺本　（国史叢書所収大石寺本曾我物語）

大山寺本　（大山寺本曾我物語荒木良雄氏）
十行古活字本（日本古典文学体系）
（2）荒木良雄氏「曾我物語三遷の論」
『古典研究』昭和十六年十月号
（3）生田目経徳氏『標註異本曾我物語』明治二十四年九月
（4）村上学氏『曾我物語の基礎的研究』昭和五十九年二月
付篇第二章「真字本と仮名本のストーリー構造」
（5）荒木良雄氏『大山寺本曾我物語』昭和三十六年九月
（6）福田晃氏「曾我語り」の世界（上）
―真名本曾我物語の原風景―
『文学』五十七号　昭和六十三年五月

（平成五年教育研究科修士課程修了・渋川工業高校教諭）